

憐れむべきEGOISTよ : 小説

著者	池田, 小一郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 7
ページ	3 0 - 4 5
発行年	1918-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6800

憐れむべきEGOISTよ

一、二、三 池田 小一郎

午後三時は過ぎてゐた。

歌子の部屋は居心地のいゝ部屋であつた。八疊に、可成り廣い縁側が附いて、その縁側から直ぐ芝生の庭になつてゐた。歌子は花モスリンの蒲團にくるまつて、横向きに寝てゐた——紫天鵝絨ビロードからさしのぞいた眞白な左の手は無意識に唇を軽く弄んで、その中指に大きな眞珠が輝いてゐた。歌子はこの眞珠が好きであつた。眞珠は幸福のシンボルだといふ事を、尙美堂や三越のタイムスに讀んでから一層好きであつた。だから、これは御稽古にでも、お芝居にでも、旅行にでも何處にも離されなかつた。尤も金臺の細工も上手に出来てはゐた。彼の父はその町の銀行家である。資産もある。且つ歌子は兄妹なしの一人ぼつちと來てゐるから、我儘は自由に通る。彼は障子を明け放して硝子戸をピツシリ閉め切つて居た。外には春雨が降つてゐる。タンポポの穂のやうな、練り絹のやうな氣分の春雨は嬉しい雨。秋の雑木林の時雨もいゝ、夏の夕立も清々しい、けれどもこないゝ氣分の雨がまたとあらうか。それ、常盤木のあひ間まから、吉野櫻さへ、風もないのに舞ひ散つてゐる。歌子はフト繪心とも歌心ともつかぬ情緒がわき出る。「あすこに蛇の目さして立つてたら、花瓣びらが美しくクリーム色のぬひとりしてくれるわ」。など考へると自然に頬笑まれた。それから、その向に唐津嶽が暗紫色に烟るのを見ては「不斷著にあんな色のも欲しいけど」。とたわいもない事に氣を移してゐた。けれども、如何やらすると、心の奥底に重い重い鉛のやうな蟠わだかまりが頭をもたげては、彼女の胸一杯

を甚だ苦々しくした。「あゝ」と長い忍びやかなといきの後、「一層の事、さらけ出してしまはうかしら。ほんとに苦しいわ」と呟いた。その時、自分は廻り縁をノタリノタリ歩いて行つた。自分の視線が横はつてゐる歌子に落ちた時、彼は常にある軽い驚きの色で自分を見返した——たつた今の憂ひの様子はなくて。自分がかまひなく枕元の坐蒲團にあぐらをかいた。

「まだいけないね？」

「いゝね。濱野さんは、ごこもいゝんだつて仰しやるわ……唯ねね、扁桃腺が少し充血してゐただけだつてよ」。

「そんなら、床に就くまでもないぢやないか。大儀さうに」。

歌子は優しい目をして自分をして自分で見せた。二十歳にもなれば女の目は濃艶な一種の輝きを持つ。歌子の目も意味ありげであつた。

「だげど。何だか頭が重いんだもの」。

「血の道だよ」。

「あら嫌な！兄さんは近頃血の道つて言葉覺れたものだから、何でもかでも血の道、血の道つてね。ホ、ホ、」。

自分はこちらからかふ氣で言つた。

「この前、濱野さんが謠曲の會で家に來たね。僕その晩聞いたんさ。その曰くさ、歌ちやん達のやうな未婚の人に、醫學上何でもないのに、悪い悪いつてこぼしてゐる人がある。僕はその人の両親に、實はこんな病氣

には薬はないんですよ。葡萄酒で薬代をごまかしてもいゝんですが早く御嫁さんになすつたら如何でせうつて忠告してやるつて言つたよ」。

「随分だわね」。

二人は非常に笑つた。

「そんなら私起きるわ、濱野さんにそんなお忠告でもして戴いたら大變だから」。

半ば笑ひ聲でかう言ひながら彼は床を脱けて、衣桁にかゝつた矢絰を着た。その裏は人の目を痛くいる紅の絹が著けてあつた。

「兄さんに一昨晚、夜櫻見について行つたせいよ」。

「さうか。少し風が冷たくはあつたが」。

彼は白い素足の儘、二三歩して姿見の前に立つた、男の目には可笑しい程、下の方に紐を結びながら。著物が胸のあたり、蛙のやうに膨むんだのを上手に直した後、足元に昆布巻か何かの様に圓く巻いた縞の博多帯の一端を手執る。帯はキユツ／＼と絹の音がしたり、ほどけながらコロ／＼と夜具の上に轉がつたりするやがて、フンワリな乳房の下あたりに巻きたてられる。それが濟むと今度は大巾の派手模様帯の織物の名は自分は知らない。折々著物の脇下から、美しく曲線的な臂がちら／＼覗かれる。

それから彼はクルリと背を向けて、あの大きな帯を手器用に太鼓に結び上げてしまつた。帯上げの結びを挟みながら彼は鳩の様に胸を張つて見た。彼は、縁側の長椅子に座を移しながらも尙たわす見入つてゐる自分に氣付いた時には、流石に氣恥しかつたと見えて、ポツと顔を赤らめた。

「見ちやいやよ。恥しい。」

しかし、内心は嬉しく思つてゐるに違ひなかつた。歌子はそんな女なんだから。彼は鏡臺の前に体をおちつけてから、髪のはつれをうるささうに、しかも楽しさうに両手の指先で掻き撫でた。紅い紅い下唇に墨がにじんでゐた。

「まあ！」

彼は袂を探つて、惜し氣もなく藤色の絹ハンカチで唇を拭つた。

「私、筆を嚙んだまゝだつたのだからね。」

仰山さうにかう言ひながら彼は頬笑んだ。自分はこの笑を見る度に一切を忘れた。そして眞面目な意味で、心から抱擁したく思つた。

自分は考へた。笑は生理上の發作である。涙も發作である。兩方共、何と文學的に美術的に美しい發作であらう。而かも、その極美は、發作の起らうとする瞬間にあるのだ。涙が靜的だと言へるなら、笑は動的であらう。涙は繪畫的で笑は音樂的、涙は東洋的で笑は西洋的、涙は赤い花で笑は白い鳥、涙は夕方の春雨で笑は午の長閑さ………自分はどこまでも、この二つを對照の中に眺めたい。

歌子は白粉紙を一二枚裂いてお化粧の崩れを直し、快いときをして縁側に歩いて來た——白粉紙の皺になつたのでソツと手の甲を擦りながら。

「矢張り起きてた方がのんびりしていゝわね。」

彼はさつき、自分があぐらしてゐた秩父の蒲團を引き寄せて坐らうとする。

「お掛け。」

自分は長椅子の片方を譲らうとする。

「嫌よッ。フフフ。」

「何がフフフ？」

「でも、下女^{ねや}などが、お二人並んでいらつしやると、そつくりですわなんて、冷かすんだもの。」
と聞^きぬ位^ゐの聲。流石に自分は赤くなつた。

「ハツハツハハ。でもいゝや。」

それから自分は女^めの世間^よの出来事を聞かされた。そんな時に彼はきまつて得意の色を示した。そして「兄さん」とは呼びながら、自分よりは齡下^{としした}で居ながら、何處^{どこ}だか、弟扱^{てい}ひにする風が見^みえた。ジツト、自分がそのなる儘^{まま}になればなる程、その程度は進んだ。そして自分はそんな時に偶發^{ぐふつ}的に女のエゴイズムを見た。

次の間で電話のベルが鳴つた。暫くしてまた、稍々長く鳴つた。お竹の聲がする。

「はい。……有難う。さよなら。」

歌子は彼を呼んだ。

「竹や。どこから？」

「銀行のボーイさんでした。お父様はお食事の用意いりませんよ。そして今夜、晚いかも知れませんがつて。」

「さう？では兄さん、今晩は階下^{した}に居て頂戴ね。淋しいんですから。」

淋しいといつた所で伯母に、爺やに、二人の下女が居る。

「御馳走でもあるのかね。」

「あら。現金なことね。」

「でも仕方がない。僕には夜の時間は最も大切なんだから。」

「國譯大藏經と首つ引きでせうよ。そんなら、わたし負にして何かこさへるの。おいしくね。」

お竹は、肉の豊かな兩頬に大きな笑窪を見せながら、夜具をしまつたり、そこらをツツと掃いたりした。

「オイ、竹や、コ、アでもくれないか。」

「私にも頂戴な。」

近頃歌子は深く考へてゐるものがあるらしかつた。自分は夫れを戀の自覺だと想像した。自分は思つた。戀の心は金魚瓶をかつて立つ心であらう。金屬性ともいふべき特種の光輝を有する硝子瓶中の水は、ともすると溢れ出ようとする。恰も戀の心がワク／＼しながら、少しも落着がない様に。

「銀行は何だらう？」

「いつもの重役會議だと思ふわ。」

「しまつた。小城の櫻見を約束してあるんだのに。」

「あら！こんなお雨にでも？」

「あら！」

「おかしいわ、お天氣にこそいふんぢやないの？」

「ハハハ。それが月並といふんだよ。オイ。月並がわかるかね。歌ちやん達は先づ、月並を味ふがいらんだ。最初から、月並を超越しようと思つて掛るから、婦人公論にかつがれたり、與謝野晶子が現代の紫式部にも見ゆるんだ。馬鹿野郎！」

「私なんか、知らないわ。」

我儘な歌子は心から怒つて居る。瞳を膝の上に落す、不満の證據である。けれどもその非を悟ると、媚びる様に話しかける。

「兄さん達二人は、よつほど變り物だね。」

自分が笑ふかと思つて彼は自分の顔を覗き上げる。自分は默然としてゐる。そしてジツと彼の所作を無頓着に見てゐる。之が彼女には最も耐へられない屈辱であるのだ。何故なら、彼は男子に對する自己の美の權威をあまりに過信してゐるから。こんな時には、その顔には凄惨な程、悲痛の色があらはれる。その癖夫れを隠さうとする。益々ながく。その結果は二つの形で現はれる。ヒステリーのツイと其の場を立ちのくか、威嚇は、グンと自己のすべてを抑へつけて、馴れなれしく寄つて來るのである。そして、それは彼にしか出來ない事である。

その晩、伯父の歸宅は果して晩かつた。茶の間の十疊で、歌子の手になつたまづいカステラをほゞばりながら、皆、楽しく語らつた。歌子は、自分とのいさかひも忘れてよくしやべつたり笑つたりした。

× × × × × × × ×

自分は、それから殆んど一ヶ月後、熊本の下宿で歌子からの厚い封書を受取つた。いつものハイカラな對簡

とは變つて、白の質素なものであつた。自分は氣もとめずに封を切つた。然し、今日のは、香紙にほひがみの馨かほりさへしなかつた。

× × × × × × ×

兄さん、繪端書ありがたう。西洋にはあんな麗はしい所があるんでせうね。

私の兄さん、私の好きな兄さん。私かう呼ばはりながら、路頭をさまよふ狂人きちがひになりたいわ。私はこんな種類の女狂人を見る度に、なんだかうらやましくなりません。現に狂つてるつて？さうでせう、私は狂つてるに違ひありません。兄さん、私は、涙が。嬉し涙が。………つまらない。この涙こそは二十年の過去に對する冷酷な諷刺、諧謔なんです。私は久しい間、氷と熱との衝突と、愛情と憎惡との葛藤に困しんだのですよ。私はこんな恐しい矛盾は今日忽然か醸かされたのではなくて、私のすべてが是であるといふ事を告げねばならぬはめになりました。然し兄さん。どうぞ冷静になつて下さい。ほんとうに冷静に。勿論私は何處までも眞摯です。決して物好きや、困らせの爲めに、この手紙をものするのではないのですから、怒りつばの兄さん、今日ばかりはね。例へば熟し切つた柿の實は、久しからずして一度は落下するのですが、全く是と同様に、結局、私が兄さんに對するこの呪ふべき仕方も必然の結果です。少くとも私だけは左様に信じます。とはいへ、私はこの手紙が兄さんの手に握られた、瞬間が怖しくて怖しくてたまりません。私はこんな強い恐怖をはじめて経験するのです。かう坐つて居ても、幾度おくれ毛の頬に垂れるのを噛み切り、幾度金ペンを投げてレースのテーブルクロスを汚したかされません。幾度ライターペーパーを引きむしつて、熊本の方に向つて、兄さんに心からわびやうと力めたかされません。夫れ程私は激昂してゐるのです。亢奮し

てゐるのです。いね、激昂や亢奮などの貧弱な文字では、到底、私の心理の説明がつかないのです。けれども私は此の感情を原因する過程に對して從來の道徳を標準として、是非の判断を下したくないのです。よしや兄さんの眼には夫れが如何様に寫らうとも。

兄さん、重々御願ひ致しますが、私の拙い水蒸の跡をどうぞ最後まで讀み通して下さいませ。

私は五年昔、十年昔を追懐すると、なんでこの手紙を認めるだらうと怪しみます。私は兄さんが家にいらつした頃を、はつきり記憶する事が出来ません。たしか、私がやつと四つ五つの頃でせうね。兄さんのお父様——私の爲めには、天にも地にもたつた一人の叔父様は、上海通ひの船長さんだつたさうですわね。所が臺灣沖で大しげに逢つて難破なすつたし、叔母様は、お産の日だちがお悪くて、お二人共お亡くななすつたのですつてね。一人ぼつちに殘された兄さんは、お石碑さへ立たない中に、私の家にいらつしたのですわ。私は何も知りませんでしたから、色の黒いデツ、ブリ、太つた、小さな異性の遊び仲間を得た時、どんなに、嬉しかつたでせう。そして私は、兄さんのハイカラな服が好きでした。どうかすると、直ぐ打ち沈んで大きな目に涙を溜めた所は大嫌ひでしたけど。(私は性來、樂天家ですもの)

二人の春は随分長い(悪い意味でなくてよ)春でしたね。その間の記憶は一として私の生涯の最も嬉しい、最も願はしい記念でないものはありません。私は衣干山が忍ばれます。今日の様なららかな日には、下女か誰かに手を曳かれながら、よく、つくしんぼうを摘みに行きましたね。ねねやは、つくしんぼうを二人に委かして、自分は蓬や、または、あの汚い池の縁で、田芹を摘んでみました。そして二人は、青い草の上に

「オチ、しながら、キ、ツ、笑つたり、おぼつかない唱歌を歌つたりしましたわね。殆んど、今から考へると無意識に。」

夏の夜は、皆、お庭に出ましたね。私は小兎のやうにピン、コ、馳けまはるのが大好きでした。兄さんはどちらかといへば、黙つてるのがよかつたんでせう。藤椅子にかけた私の母が「坊ちゃん、いらつしやい。お月様に兎ちゃんがお餅やお米をつけてますのよ。」など言ふとおとなしくだつてしまひましたね。私はそれがじれつたくてたまりませんでした。相手を失つて半分はくやし泣きして、兄さんや母の膝にすがりつきました。そしていつも叱られましたわ、「まあ、氣のきつい兒だ事ね。」つて。なるほど、私は、土藏の蔭で入目を眺めたり、お人形の髪が鼠にかじり取られた時頬づりして泣いたり、雨だれの音を數へたりする事は全く不可能の事でした。そして兄さんは、石筆でも、鉛筆でも、よく汽車や兵隊さんを畫きましたね、私は繪は、畫帳やお伽本を買つてもらひさいすればいゝんだわと思つてました。二人が小學校を出る迄に、もつと多くの事、風船玉を奪つこしたりした事までも私の愛着になつてゐます。

さて、兄さんがお城趾しろあざの學校に這入ると同時に私は黒木の門をくぐりました。それから私の生活は大轉換を來きたしました。それは誰にだつてあるでせうけれど私ののは、そんな平凡へいべんなんぢやないのですわ、しかも兄さんは全く是を知らないで居るのです今に。この新時代は即ち得意の時代です。先づ私は、をこがましいけど、私の美といふ者に自覺しはじめたのです。私は學校で一等可愛いと言つて皆から歓迎せられました。お友達仲間でもみ髪が長いといつては、うらやまれ、笑わら窪くぼが美しいといつてはからかはれました。私の衣裳や髪のピンが變る毎に皆は私にたかつて來ました。「私が男なら早く歌子さんをお嫁さんに貰もらひますわ。」など女の

先生の一人は申しました。こんな事は怖しかつたけれど又どうやら胸が躍りました。私は又、お友達と笑ひ話の中に、男學生の戲談の間にも歌子といふ二字が出るといふ事を、聽かされました。

私はこんな事實を綜合してから、私自身の美について確實に意識するやうになりました。そして何はさておきこの美一つさへあればといふ氣になりました。

繪を解しない私は音楽に天才だと先生に褒められました。聲樂もですけど、殊にピアノに優れました。それは、私の四六時中、いつも浮き／＼した氣質とピツタリ、接合したせいせう。とりわけ洋曲の高低の烈しいのが好きで、私は、學校のの以外に、こつそり新譜を取寄せて、一心に練習しました。ホラ、兄さんが「騒々しい」つて、度々二階から降りて來たちやありませんか。そして夫れは、いはゞ只皆をおごかしてやりたい爲めでした。或日、私は、舞踏の後で、くづれかけた束髪を(その日に限つてお下げでなく)直してゐました。先生は軽い疲勞を覺つて、ボンヤリ、ピアノに倚つたまゝで居ました。この先生は、口癖のやうに私の手振が美しいつて仰しやつた方かたよ。そして私の居るのに氣もどめずに、何だか深く考へ込んでゐらつしやるのでした。私はその先生にもきつと愛されてゐると思ひましたから、今の様子を見ては、私の氣分では、輕蔑された氣がしてなりません。だから私は「先生つ。」と呼ばはりながら、うぶらしく近づきました。「ハイ。何です。」と先生は急に愛想を作つて立ちました。私はもう勝利者の氣でいひました。「先生。退いて頂戴な、私一寸、ソブラのソロをひきますわ。先生御存じ？」先生は知つてゐるらしかつたけれども「いね、僕知らないんです。」と申されました。それはキット私を失望せしめない爲めに外ならぬのでした。何故なら、それ程先生は私に愛着してゐる事が見えすいて居ましたから。私は最初の鍵盤を忘れて小首を傾けました。先

生は私を抱くやうにして後から覗いてゐました。だれぞ私は何にも氣づかぬらしく、その曲をやつてのけました。「先生。面白いでせう？」答はなく、大きないきり忍びやかないきが耳に入りました。「面白い事？」私は兄さんでもあるかの様に、親しげに先生の顔を見上げました。それに關らず、随分ぢやありませんか。先生の顔つたら、何だか悲しさうな、物言ひたさうな。そして口を尖らして唇はブルブルと痙攣的に打ち震へてゐましたのよ。私はこはくなつて來ました。私は腰を低くして逃れやうとあせりました。然しその時に先生の大きな手は私の二の腕をきつく掴みました。私はハッと思ひました。——直覺的に言ひしれぬ不安に襲はれて。私の体は蛇ににらまれた蛙同様、スツカリすくんでしまひました。漸く私は勇を鼓して再び先生を見ました。先生の眼には、男の癖に——涙が滲み出てゐました。その瞬間、私の兩手は幅の廣い男の掌てのひらに包まると同時にきめの荒い、そして神經質な顔は私の紫色に變じた頬にジリ、ジリ、接近して來ました。先生は大膽にも女の生徒に接吻したのです。私の意識は夢でも見るやう、全く眩惑されました。時も時、折も折、開いた儘の入口から呎尺に近づく大男あるのさへ見ぬない程。それは勿論校長先生です。翌日、時間中に校長室からの呼出しが來ました。私はそれから何隱くさず事實を告白しました。——無邪氣にすゝり泣きして。校長先生は色々私に悟してから、廊下まで送り出して下さいました。私は全く赤ん坊になつた氣で順々乎としてゐました。最後に先生は、「心配するんぢやありませんよ。」と優しく私を宅に歸らせました。數日後、掲示場に体操の先生の退職の文字が見出された時、流石にドキッとししました。あゝ。何といふ私の罪でせう！

この事件からではありますまいけれど、何だかピアノピアノに嫌氣がさしました。これから、今までは兄さんにい

つも進めに進められて稽古したお琴に心を奮おこげました。その理由は、學校出てからはピアノのいゝ先生がみつからない事と、もう一つは、未だ日本の社會には洋樂が稀で、且つ自分の美と才能を誇る機會が反つてお琴の方が多いといふ事です。お琴に就いてもう一つだけ申すべき事が御座います。夫はほんといゝ恐しい、あゝ兄さん！今でも全身がワ、ナ、ハ、振へますわよ。然し然し、私は已に覺悟をしてゐるんです。——兄さん申しませう。それはね、この間の事なんです。忘れもしません、三月の十七日（おかしな數字ぢやありませんかね。）私の待ちわびた三曲合奏會が、なにがし座で催催はされました。私はこの日、「根ね引き」の筈でしたのに、他の人ほかの御都合で習ひたての「八重衣やえころも」——兄さんには耳新しいでせう。この曲を石川先生のお三味線と合せる事になりました。それも型の如く濟んで私はウンザリした氣味で樂屋にいこつて居ました満足された處榮心の嬉しさを味ひながら。その時突然私は或人に、思ひがけない求婚をされたのです。私はいさかひしました。が、以後處女の誇を失つたので御座います。私は夫れがくやくてくたまりません。私はその人の心臓をわぐり出して、血潮の最後の一滴までなめつくしてやりたいのです。骨髓の纖維まで喰ひ入つて、一つ一つの細胞を噛みひしいでやりたいのです。けれども今更、私は兄さんに對して言ひわけがましい事をしたくありません。するだけの權利も自由も全く私にはないんですし、又、辯解的な、説明的な生活は最も嫌ひなんですから。

私はこれまで、主に外から見た私といふものに就いて告白しました。随分兄さんの驚異があつた事と存じます。けれども内の方は如何でせう。兄さんは私の内的の部分には全く盲目でせうよ。私は躊躇なく、假面を

剃ぎペールを脱します。兄さん私、兄さんには濟みませんが宗教などは大嫌ひ。理論はさておき宗教だつて人が作つたものぢやありませんか。その人爲的なマツチ箱にわざ／＼這入り込んで、懺悔せよ。然らば汝は救濟されん。とか、目醒めよ、汝の身邊に、普放無量無邊の光明漲れり。とか酔狂するなほんとうに阿呆らしいぢやありませんか、お坊さんや牧師さんのように當面にパンの問題があるならいさ知らずですわね。私は兄さんの御説教に鹿爪らしく聽いてゐましたが、あれはほんのおつきあひにでした。それを本氣にうけた兄さんは「眞の自己」は宗教的覺醒それ自身にその絶對的生命を見出すとか、何とかむづかしい事をよく繰返しましたね。そして遂には涙まで見せて説いてくれましたね。然し私は、お安く屈するやうな、お目出たい女ではなかつたのです。私はいつも、おいぼれ坊主の寢言みたいな言ひ草に誰が耳貸す暇があらうか、この短い人生の春を、とその度毎に反射的に考へるのです。いはゞ、私の生命は實に愛にあつたのです。いね私のこの「美」そのみにあつたのです。そして現に。

ホホ、ハ、兄さん泣かなくつていゝでせう。何がくやしいのですか。何が反逆ですか。是が私のすべてですのに。これが赤裸々の私なんですのに。私はどこまでも私自身の「美」をふりかざして新戰場に臨む覺悟です。宗教などといふ語の蔭にたじろくのは弱者の行爲ではありますまいか。私、痛快ですよ。(兄さんの言葉を借りていへば)これこそ徹底的の痛快でせう。御覽よ。私の美の前には老若男女の別なく、みんなババ／＼へたばりかへります。私がその勝利者としてそれを眼下に見下すのですわ。

私は兩親を見る時に、何故あんなに昔堅氣の父が、あんな放逸な母を迎へたかを怪しみます。父が青なら赤

は母です。母が南極なら父は北極ですもの。いよいよ私は、あんな才氣と美を持つ母でありながら、なんでも、こんな時勢後れの家庭の人となつたらうとくやしう御座います。私は無論、母の同情者です。私は彌岡柳町の流行つ兒、秀奴の子なのです。私の血管には藝者秀奴の艶かしい、しかも自由な濃い血潮が充ち溢れてゐるんです。私は、高膝をして、長火鉢に烟管を叩く母を見ます。宴會で晚いと父につきかゝつてゐる母を見ます。晩酌は愚かな事、どうかすると、朝からチビリ／＼飲んでゐるのを見ます。父が留守だと好んで強い洋酒をあふります。そして愉快さうに、お箱のしんない新内を喰ります。しかも父は是等に對して何等のきつい叱責さへ致しません。どう／＼近頃は「うちやつとけ。」と言つてこぼしてゐる位です。皆兄さんも御存知の事です。私は是等を見せつけられて、益々、男はお人形だ、一顰一笑で女の儘になるんだわと考へました。考へてそして確信しました。是が私の哲理です。

然し、兄さん。可笑しいでせう。私は今までついぞこんな思想をおくびにだつて出さなかつたでせう。さうですとも、私は誠に家庭では純良な子女で、學校では柔順な生徒なんですもの。兄さんにも色々な修養をさして戴きました。——この意味からでも兄さんは私の大恩人の一人です。けれどその消極的な事はとても私はうけ入れる事は出来ませんでした。(あんまり兄さんの嚴格さに、餘儀なく、見せかけだけでも従はねばなりませんでしたが)だから私は非常に兄さんを愛しましたけれど、それと同じに強い憎しみを感ぜました。

私はどう／＼私のすべてを底を叩いて兄さんの目前にさらけてしまひました。然しこれは、悔改める覺悟の

もどでもありません。兄さんの寛容を願ふ爲めでも尙ありません。そんなつもりなら、なんで未來の郎君たる人にかくもあつがましく申されませう。郎君とはおかしい？ いね、もうきまつてゐるんです。兄さんは全く家の養子ですよ。嘘？ いね、決して。それでは戸籍謄本を御覽なさいな。明治四十四年五月幾日といふ日に、ヤンと入籍してゐるんですから。

けれども私は家が大嫌ひです。この現實主義の現代に、名門もへちまもあるものですか。そんな空文よりも舊弊を脱し得た新しい自由が一等たのもしいと思ひます。さうすると私は矢張り秀奴の子ですわ。それとも知らぬ私達二人は二十年の同じ一直線を辿つて参りました。しかしその直線は今日になつてはじめて直線の定理にある直線ではない事がわかりました。そして今日がその末端ですわ。ここで私は私自身の自由な空気を、せい一杯吸ふ事が出来ます。左様なら、兄さん。これがお別れです。兄さんは兄さんの、理想や主張がありません。勿論私にだつてゐるんです。兄さんは雄々しく兄さん自身の彼岸に新生命を開拓して下さい。

私は私で、遠慮會釋なく私の確信する最善に向つて突進する覺悟です。さらば。兄さん。私の最も愛し、最も惡む兄さんよ。

(一九一八、五)